「共通テスト」を受験する人対象の対策講座です。

「共通テスト」は、「知識・技能や思考力、判断力を問う」とされ、複数の資料を読み比べたり、生徒同士や教師と生徒たちとの会話文を素材としての問題が出題されたりします。

それらの問題も本講座で扱いますので、しっかり取り組んでいきましょう。

とは言え、古文や漢文を正しく読解するために必要な学力は、どの大学だろうが、共通テストだろうが、変わらず同じです。

古文であれば、「重要単語」と「古文文法」などの読解のための土台や、「基本的な読解ルール」、「古文常識」を理解できていなければ読めません。漢文であれば、「語順」や「置き字」などの土台と「重要句法」、重要単語や頻出の「読み」などを押さえる必要があります。

本講座では、これらは既に理解できているものとして授業を行いますので、それらが未学習の場合は、先に「高1・2古文〈読解編〉」「高3スタンダードレベル古文〈読解編〉」「高1・高2・高3漢文」などの講座を受講してから、本講座を受講してください。

それでは、共通テストで古文・漢文も得点源になるように、一緒に頑張っていきましょう！

岡本　梨奈

予復習・授業の受け方について

各講の動画を見る前に、必ず該当の講の予習を（辞書など使わず自力で）してください。
制限時間は各大問につき古文二十分、漢文十五～二十分を目安に実施してください。
ただし、自身の戦略が既に立っている人は、自分が決めた時間配分を目安に実施しましょう。
また、万一、目標時間内に解けなかった場合は、そのまま最後まで納得いくまで解ききってください。そして、現状何分かかったのかを確認すること。どれくらいオーバーしてしまったのかを把握して、目標時間内に解ききるためにはあと何分縮めなければいけないのかを意識してください。

予習が終わったら、なるべく時間をあけずに該当講義の動画を見てください。
講義を見終えたら、復習を必ずしましょう。間違えた問題があれば、何が原因で間違えたのかを各自で分析して、そこを潰していきましょう。ちなみに、目標時間内に解けない人の原因の多くは、「単語」や「文法」の意味が出てくるのに時間がかかりすぎなことが挙げられます。「理解はできているけれど、出てくるのが遅い」という状態だと、やはり時間がかかってしまいます。秒速で出てくるくらいに何度も復習しましょう。
それらができているのに時間がかかる場合は、選択肢を横に読み比べるスピードや、要領の良い解き方ができているかどうかなど、さまざまな原因が考えられますので、どこで手間取ってしまったのかをご自身で分析してください。
あと、復習の際に再度選択肢を見て、誤答選択肢の「どこが間違いなのか」がわかるかどうか、どういうひっかけにしているかなども意識して分析してみてもよいでしょう。
本講座をすべて受講した後は、共通テスト用の演習問題をどんどん解いてください。
もちろん過去問も良い演習になりますので、本試験も追試験も手に入る分は必ずチャレンジしましょう。

目次

古文
第１講 古文対策 その１……p 1
第２講 古文対策 その２……p 17
漢文
第３講 漢文対策 その１……p 31
第４講 漢文対策 その２……p 43

第１講　古文対策　その１

第４問

次の文章は、いずれも物語の一節で、【文章Ⅰ】は『在明（ありあけ）の別（わかれ）』、【文章Ⅱ】は『源氏物語』若菜下の巻である。これらを読んで、後の問い（問１～３）に答えよ。（配点　45）

【文章Ⅰ】 右大臣の娘である大君（おおいぎみ）は、夫である左大臣の子を妊娠している。一方、右大臣の妹である女君は、かつて契りを交わした左大臣との関係が途絶え、苦悩を深めていた。そのころ、大君が病になり命が危うくなったため、僧が呼ばれて祈禱（きとう）をすることになった。

山（注１）の座主（ざす）、慌て参りたまへり。御枕上に呼び入れきこえて、右の大臣（おとど）、御手をすりて、仏にもの申すやうに、「ただ、いまひとたび、目を見合はせたまへ。あまたはべる中に、何の契りにか、(ア)いはけなくよりたぐひなく思ひそめはべりにし闇（注２）を、さらに晴る（注３）けはべらぬ」と、泣きまどひたまふに、いと静かに数珠（ずず）押し揉（も）みたまひて、「令（注４）百由旬内（りやうひやくゆじゆんない）、無（む）諸衰患（しよすいぐゑん）」と読み a たまへる御声、はるかに澄みのぼる心地するに、変はりゆく御けしき、

メモ欄

いささか直りて、目をわづかに見開(あ)けたまへり。あるかぎり、(イ)なかなか手まどひ(注5)をして、「誦経(ずきやう)よ、何よ」とまどひたまふに、なほ心ある人とも見えず、御かたちも変はりたるやうにて、その人とも見えたまはず。いとにほひやかにけ近きものから、妬(ねた)げなるまみのけしき、左の大臣はさやうにも分(わ)きたまはず、父殿ぞ、いとあやしう、「思ひかけぬ人にも似たまへるかな」と心得ず思(おぼ)さるるに、うちみじろきて、

　さまざまに朝夕こがす胸のうちをいづれのかたにしばし晴るけむ

とのたまふけはひ、いささかその人にもあらず、違(たが)ふべくもあらぬを、父大臣のみぞ、かへすがへす「あやし」と傾(かたぶ)かれたまふ。

　さて、わが御心おはせねば、また消え入りつつ、さらにとまるべくもおはせぬを、「今はけしうbおはせじ」とおし静めつつ、いたく嗄(か)れたる御声やめて、薬師(やくし)(注6)の呪(ず)をかへすがへす読みたまふに、御もののけ現れ出(い)でて、小さき童(わらは)に駆り移さ(注7)れぬ。(ウ)呼ばひののしる声に、今ぞ

【人物関係図】

右大臣（「父殿」「父大臣」）――大君
　｜
女君

女君＝＝左大臣
大君＝＝左大臣

メモ欄

御心出で来るにや、人々のまもり c きこゆるを、「はしたなし」と思して御衣（ぞ）を引きふたぎたまふ。

（注）
1　山の座主――比叡山延暦寺（ひえいざんえんりやくじ）の最高位にある僧。
2　闇――子を思うあまりに分別を失う親心のたとえ。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰（ごせん）和歌集』）による。
3　晴るけ――下二段活用動詞「晴るく」の連用形。
4　令百由旬内、無諸衰患――『法華経（ほけきよう）』の一節。周囲から衰えや患いをなくすという内容。
5　手まどひ――慌てふためく様子。
6　薬師の呪――薬師如来の力によって病気を治す呪文。
7　駆り移されぬ――「駆り移す」は、もののけを病人から離して他の人に乗り移らせること。

メモ欄

【文章Ⅱ】 光源氏（本文では「院」）は、病になり生死の境をさまよう妻を救おうとしている。その病には、かつての光源氏の恋人であり、今は亡き女性が関わっていた。

院も、「ただ、いまひとたび、目を見合はせたまへ。いとあへなく限りなりつらむほどをだにえ見ずなりにけることの悔しく悲しきを」と思しまどへるさま、とまりたまふべきにもあらぬを見たてまつる心地ども、ただ推しはかるべし。いみじき御心のうちを仏も見たてまつりたまふにや、月ごろさらに現れ出で来（こ）ぬもののけ、小さき童に移りて呼ばひののしるほどに、やうやう生き出でたまふに、うれしくもゆゆしくも思し騒がる。

いみじく調（てう）ぜられて（注8）、「人はみな去りね。院一（ひと）ところの御耳に聞こえむ。おのれを、月ごろ、調じわびさせたまふが情けなくつらければ、同じくは思し知らせむと思ひつれど、さすがに命もたふまじく身をくだきて思しまどふを見たてまつれば、今こそかくいみじき身を受けたれ、いにしへの心の残りてこそかくまでも参り来たるなれば、ものの心苦しさをえ見過ぐさで、つひに現れぬること。さらに知られじと思ひつるものを」とて、髪を振りかけて泣くけはひ、ただ、昔見（注9）たまひしもののけのさまと見えたり。

メモ欄

（注）８　調ぜられて――「調ず」は、ここでは祈禱によって退散させようとすること。
９　昔見たまひしもののけ―― このもののけは、以前にも光源氏の前に現れていた。

メモ欄

問１ 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 23 ～ 25 。

(ア) いはけなくより 23
① かわいらしいので
② 幼いころから
③ 言い表せないほど
④ 他の子よりも

(イ) なかなか 24
① かえって
② ひたすら
③ たちまち
④ 一斉に

(ウ) 呼ばひののしる 25
① 近づきながら悪口を言う
② 泣きながら恋い慕う
③ 大声を出して叫び続ける
④ 名前を呼んで祈禱する

メモ欄

問２　波線部ａ～ｃの敬語の説明の組合せとして正しいものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

①
ａ　書き手（作者）から山の座主への敬意を示す尊敬語である。
ｂ　山の座主から右大臣への敬意を示す丁寧語である。
ｃ　人々から大君への敬意を示す尊敬語である。

②
ａ　書き手（作者）から山の座主への敬意を示す尊敬語である。
ｂ　山の座主から大君への敬意を示す尊敬語である。
ｃ　書き手（作者）から大君への敬意を示す謙譲語である。

③
ａ　書き手（作者）から山の座主への敬意を示す尊敬語である。
ｂ　山の座主から右大臣への敬意を示す丁寧語である。
ｃ　書き手（作者）から大君への敬意を示す謙譲語である。

④
ａ　書き手（作者）から左大臣への敬意を示す尊敬語である。
ｂ　山の座主から右大臣への敬意を示す丁寧語である。
ｃ　書き手（作者）から大君への敬意を示す謙譲語である。

メモ欄

⑤

a　書き手（作者）から左大臣への敬意を示す尊敬語である。
b　山の座主から大君への敬意を示す尊敬語である。
c　人々から大君への敬意を示す尊敬語である。

メモ欄

問３　Ａさんのクラスでは**【文章Ⅰ】**を読んだ後、それが**【文章Ⅱ】**の影響を受けて作られたことを学んだ。次に示すのは、二つの文章の共通点と相違点について、生徒たちがグループ内で話し合っている授業の様子である。これを読み、後の(i)〜(iii)の問いに答えよ。

生徒Ａ――**【文章Ⅰ】**も**【文章Ⅱ】**も、もののけとそれに苦しめられている女性が登場しています。他に、「ただ、いまひとたび、目を見合はせたまへ」という言葉の一致など、表現が共通している点も見られます。

生徒Ｂ――そうですね。それに、「小さき童」が登場している点も共通しています。病の原因であるもののけを「小さき童」に移すことで、病人を治療する方法があったようですよ。

生徒Ｃ――たしかに多くの共通点がありますね。次に、**【文章Ⅰ】**と**【文章Ⅱ】**の相違点についても考えてみましょう。

生徒Ｄ――**【文章Ⅱ】**では、童に移されたもののけが［　X　］と言っています。

生徒Ｅ――自分の思いを伝えようとしているのですね。では、**【文章Ⅰ】**のもののけはどのような行動をとっているでしょうか。

生徒Ａ――もののけは和歌を詠んでいるのではないですか。

生徒Ｂ――あれ、この和歌は「目をわづかに見開け」た大君が詠んだものではないのですか。

生徒Ｃ――和歌の表現から考えてみませんか。「朝夕こがす胸のうち」や「いづれの

メモ欄

かたにしばし晴るけむ」とありますよ。だから、これは［Y］と考えられます。

生徒D――なるほど、そのとおりですね。和歌の前後も考え合わせると、【文章Ⅰ】では、［Z］。

生徒E――【文章Ⅱ】に比べると、【文章Ⅰ】ではもののけをめぐる状況がずいぶん違っていますね。【文章Ⅰ】は過去の作品を取り入れながらも、独自の場面を作り出したと言えそうです。

(i)　空欄［X］に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［27］。

① まわりの者がみな自分を恐れて去ってしまったので、せめて光源氏には反省している気持ちを分かってもらいたくてこうして姿を現したのだ

② 妻のために自分に謝ろうとする光源氏を憎らしく思うのに、それでも光源氏への愛情は昔のままであることを知らせたくてここに来てしまった

③ 光源氏の妻がこのまま死んでしまいそうなほど苦しんでいる様子を間近で見たいので、長年続く恨みの心を持ったままここにやって来たのだ

④ 自分がもののけとなって取りついていることは知られたくなかったのに、光源氏のいたわしい姿を見過ごすことができずに姿を現してしまった

メモ欄

(ii)　空欄 Y に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 28 。

① もののけの和歌で、退治される無念を詠んでいて、これ以上の祈禱はやめるよう頼んでいる

② もののけの和歌で、激しい嫉妬によるつらさを詠んでいて、それをぶつける先を求めている

③ 大君の和歌で、左大臣への愛情を詠んでいて、その思いをもののけに分からせようとしている

④ 大君の和歌で、熱にうなされる苦痛を詠んでいて、その原因が明らかになることを望んでいる

メモ欄

(iii) 空欄 Z に入る発言として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 29 。

① 大君の顔つきが穏やかになって、右大臣は大君が一命をとりとめたと思っているけれど、左大臣はもののけがまだ取りついていることに気づいていますね。大君はもののけから解放されず、死を覚悟して出家を決意しています

② 大君の顔つきが苦しみに満ちたものになって、これほどまでに大君を憎むのは女君の仕業だと左大臣は気づいていますね。大君はもののけから解放されずに亡くなってしまい、右大臣は着物を引きかぶって悲しみに暮れています

③ 大君の顔つきが他の人に重なって見えて、右大臣と左大臣はそれが誰なのか怪しんでいるけれど、女君だとは気づいていないですね。大君はもののけから解放されて我に返り、苦しむ姿を皆に見られたくなかったと思っています

④ 大君の顔つきがまるで別人のようになって、左大臣は気づいていないけれど、右大臣はその様子がまさしく女君のものだと気づいていますね。大君はもののけから解放された後、正気を取り戻して気恥ずかしそうにしています

「大学入学共通テスト」２０２５年度本試験より（一部改変）

メモ欄

■2025年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第4問（45）	1	23	2	5
		24	1	5
		25	3	5
	2	26	2	7
	3	27	4	7
		28	2	8
		29	4	8

■現代語訳

【文章Ⅰ】

比叡山延暦寺の座主【＝最高位にある僧】が、慌てて参上なさった。（大君の）御枕元に招き入れ申し上げて、右大臣が、両手を擦り合わせて、仏に物申すように、「ただ、もう一度、（大君と）目を合わせて【＝生き返らせて】ください。（子どもが）たくさんおります中で、どのような前世からの宿縁であろうか、幼いころからまたとなく愛しく思ってきました子を思うあまりに分別を失う親心の闇を、まったく晴らせません」と、泣き惑いなさると、（座主は）とても静かに数珠を押しもみなさって、（『法華経』の一節である）「令百由旬内、無諸衰患【＝周囲から衰えや患いをなくす】」と読みなさっている御声は、はるかに澄んで昇っていく気持ちがすると、（大君が死にそうに）変わっていく御様子が、少し回復して、目を少し見開けなさった。（周りの者は）全員、かえって慌てふためく様子で、「誦経をせよ、何々をせよ」とうろたえなさるけれども、やはり（大君は）正気の人とも見えず、御容貌も変わった様子で、本来の大君とも見えなさらない。とても美しくて親しみやすい感じがするが、嫉妬してそうな目もとの様子を、左大臣はそのように（憑依しているの）も分かりなさらず、父上【＝右大臣】が、とても不思議に思って、「思いがけない人【＝自分の妹・女君】にも似ていらっしゃるなあ」と理解しがたくお思いになると、（大君が）少し身動きをして

　さまざまに明け暮れ胸の内が焦げるように苦しい嫉妬の恨みを、どちらの姫君に（ぶつけて）少しの間晴らしたらよいだろうか

とおっしゃる様子は、少しもその人【＝大君】本人の様子ではなく、（妹である女君と）間違うはずもないのを、父大臣【＝右大臣】だけが、繰り返し繰り返し「不思議だ」と首をかしげなさる。

　そうして、（大君は）正気ではいらっしゃらないので、また亡くなりそうになりながら、まったく（この世に）留まることができそうにもいらっしゃらないのに、（座主が）「今はそんなに悪くはいらっしゃらないだろう」と（周りの人々を）静かに落ち着けながら、とてもかれた御声（での読経）はやめて、薬師如来の力によって病気を治す呪文を繰り返し読みなさると、御もののけは（大君から）現れ出て、（座主に）小さな童に乗り移らされた。（童が）大声を出して叫び続ける声に、（大君は）やっと正気に戻られたのであろうか、人々が（自

分［＝大君］を）見守り申し上げるのを、「みっともない」とお思いになって御衣をかぶって（顔を）隠しなさる。

【文章Ⅱ】

院［＝光源氏］も、「ただ、もう一度、（私と）目を合わせて［＝正気に戻って］ください。たいそうあっけなく臨終になってしまっているような時でさえ見ることができなくなったことが悔しく悲しいので」と途方に暮れなさる様子が、（院までもがこの世に）留まりなさることもできそうにないのを拝見する（周りの人たちの）気持ちは、ただ推測できるだろう。とてもつらい御心の中を仏も見申し上げなさるのであろうか、数か月間まったく現れ出てこないもののけが、小さい子どもに乗り移って大声を出して叫び続けるうちに、だんだんと（紫の上が）息を吹き返しなさるので、（光源氏は）嬉（うれ）しくも不吉にも思われて動揺なさる。

すっかり（もののけは）祈禱（きとう）によって（紫の上の身体から）退散させられて、（乗り移った子どもの口を借りて）「（光源氏以外の）人は皆去ってしまえ。院［＝光源氏］お一人の御耳に申し上げよう。私を、数か月間、調伏して苦しめなさるのが情けなくつらいので、同じことなら（この苦しみを）痛感なさるようにしようと思ったけれど、そうはいってもやはり（光源氏が）命が耐えられそうにないほど身を粉にして途方に暮れていらっしゃるのを拝見すると、今このようなひどい（もののけの）身をしているが、昔の心が残ってここまでして参上しているのだから、（光源氏の）気の毒そうな様子を見過ごすことができないで、とうとう姿を現してしまったことよ。決して（正体を）知られるまいと思っていたのになあ」と言って、髪を振り乱して泣く様子は、まさしく、（光源氏が）以前にも御覧になったもののけの様子だと見えた。

第２講　古文対策　その２

第３問　次の文章は、「車中雪」という題で創作された作品の一節である（『草縁集』所収）。主人公が従者とともに桂（京都市西京区の地名）にある別邸（本文では「院」）に向かう場面から始まる。これを読んで、後の問い（**問１～４**）に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。（配点　50）

桂の院つくりそへ給ふものから、(ア)あからさまにも渡り給はざりしを、友待つ雪(注1)にもよほされてなむ、ゆくりなく思し(注2)立たすめる。かうやうの御歩きには、源少将、藤式部をはじめて、今の世の有職と聞こゆる若人のかぎり、必ずしも召しまつはしたりしを、(イ)とみのことなりければ、かくとだにもほのめかし給はず、「ただ親しき家司(注3)四人五人して」とぞ思しおきて給ふ。

やがて御車引き出でたるに、「空より花の(注4)」と a うち興じたりしも、めでゆくまにまにいつしかと散りうせぬるは、かくてやみぬとにやあらむ。「さるはいみじき出で消えにこそ」と、人々死に返り(注5)妬がるを、「げにあへなく口惜し」と思せど、「さて b 引き返さむも

メモ欄

人目悪かめり。なほ法輪(注6)の八講にことよせて」と思しなりて、ひたやりに急がせ給ふほど、またもつつ(注7)闇に曇りみちて、ありしよりけに散り乱れたれば、道のほとりに御車たてさせつつ見給ふに、何がしの山、くれがしの河原も、ただ時の間に **c** 面変はりせり。

かのしぶしぶなりし人々も、いといたう笑み曲げて、「これや小倉(注8)の峰ならまし」「それこそ梅津(注9)の渡りならめ」と、口々に定めあへるものから、松と竹とのけぢめをだに、とりはづしては違へぬべかめり。「あはれ、世に面白しとはかかるをや言ふならむかし。なほここ(注10)にてを見栄やさまし」とて、やがて下簾(注11)かかげ給ひつつ、

ここもまた月の中なる里ならし雪の光もよに似ざりけり

など **d** 興ぜさせ給ふほど、(ウ)かたちをかしげなる童の水干着たるが、手を吹く吹く御あと尋め来て、榻(注12)のもとにうずくまりつつ、「これ御車に」とて差し出でたるは、源少将よりの御消息なりけり。**e** 大夫とりつたへて奉るを見給ふに、「いつも後らかし給はぬを、かく、

X 白雪のふり捨てられしあたりには恨みのみこそ千重に積もれれ」

メモ欄

とあるを、ほほ笑み給ひて、畳紙（たたうがみ）に、

Y　尋め来やとゆきにしあとをつけつつも待つとは人の知らずやありけむ

やがてそこなる松を雪ながら折らせ給ひて、その枝に結びつけてぞたまはせたる。

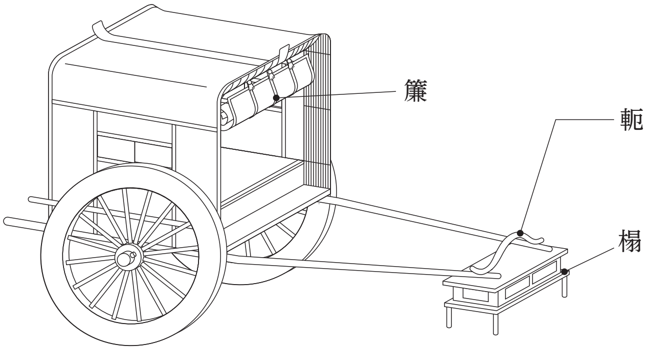
やうやう暮れかかるほど、さばかり天霧（あまぎ）（注13）らひたりしも、いつしかなごりなく晴れわたりて、名に負ふ里の月影はなやかに差し出でたるに、雪の光もいとどしく映えまさりつつ、天地（あめつち）のかぎり、白銀（しろかね）うちのべたらむがごとくきらめきわたりて、あやにまばゆき夜のさまなり。

院（注14）の預かりも出で来て、「かう渡らせ給ふとも知らざりつれば、とくも迎へ奉らざりしこと」など言ひつつ、頭（かしら）もたげで、よろづに追従するあまりに、牛の額の雪かきはらふとては、軛（くびき）に触れて烏帽子（えぼし）を落とし、御車やるべき道清むとては、あたら雪をも踏みしだきつつ、足手の色を海老（えび）（注15）になして、桂風（かつらかぜ）を引き歩く。人々、「いまはとく引き入れてむ。かしこのさまもいとゆかしきを」とて、もろそそき（注16）にそそきあへるを、「げにも」とは思すものから、ここもなほ見過ぐしがたうて。

メモ欄

（注）

1 友待つ雪――後から降ってくる雪を待つかのように消え残っている雪。
2 思し立たす――「す」はここでは尊敬の助動詞。
3 家司――邸（やしき）の事務を担当する者。後出の「大夫」はその一人。
4 空より花の――『古今和歌集』の「冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ」という和歌をふまえた表現。
5 死に返り――とても強く。
6 法輪の八講――「法輪」は京都市西京区にある法輪寺。「八講」は『法華経（ほけきょう）』全八巻を講義して讃（たた）える法会。
7 つつ闇――まっくら闇。
8 小倉の峰――京都市右京区にある小倉山。
9 梅津の渡り――京都市右京区の名所。桂川左岸に位置する。
10 ここにてを見栄やさまし――ここで見て賞美しよう。
11 下簾――牛車（ぎっしゃ）の前後の簾（下図参照）の内にかける帳（とばり）。
12 榻――牛車から牛をとり放したとき、「軛」を支える台（下図参照）。牛車に乗り降りする際に踏み台ともする。
13 天霧らひ――「天霧らふ」は雲や霧などがかかって空が一面に曇るという意。
14 院の預かり――桂の院の管理を任された人。
15 海老になして――海老のように赤くして。
16 もろそそき――「もろ」は一斉に、「そそく」はそわそわするという意。



牛車図

メモ欄

問１　傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 23 ～ 25 。

(ア)　あからさまにも　23

① 昼のうちも
② 一人でも
③ 少しの間も
④ 完成してからも
⑤ 紅葉の季節にも

(イ)　とみのこと　24

① 今までになかったこと
② にわかに思いついたこと
③ ひそかに楽しみたいこと
④ 天候に左右されること
⑤ とてもぜいたくなこと

(ウ)　かたちをかしげなる　25

① 格好が場違いな
② 機転がよく利く
③ 和歌が上手な
④ 体を斜めに傾けた
⑤ 見た目が好ましい

メモ欄

問２　波線部ａ～ｅについて、語句と表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 26 。

①　ａ「うち興じたりしも」の「し」は強意の副助詞で、雪が降ることに対する主人公の喜びの大きさを表している。

②　ｂ「引き返さむも」の「む」は仮定・婉曲の助動詞で、引き返した場合の状況を主人公が考えていることを表している。

③　ｃ「面変はりせり」の「せり」は「り」が完了の助動詞で、人々の顔色が寒さで変化してしまったことを表している。

④　ｄ「興ぜさせ給ふ」の「させ」は使役の助動詞で、主人公が和歌を詠んで人々を楽しませたことを表している。

⑤　ｅ「大夫とりつたへて奉るを見給ふ」の「給ふ」は尊敬の補助動詞で、作者から大夫に対する敬意を表している。

メモ欄

問３　和歌Ｘ・Ｙに関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［27］。

①　源少将は主人公の誘いを断ったことを気に病み、「白雪」が降り積もるように私への「恨み」が積もっているのでしょうね、という意味の和歌Ｘを贈った。

②　源少将は和歌Ｘに「捨てられ」「恨み」という恋の歌によく使われる言葉を用いて主人公への恋情を訴えたため、主人公は意外な告白に思わず頬を緩めた。

③　主人公は和歌Ｙに「待つ」という言葉を用いたのに合わせて、「待つ」の掛詞（かけことば）としてよく使われる「松」の枝とともに、源少将が待つ桂の院に返事を届けさせた。

④　主人公は「ゆき」に「雪」と「行き」の意を掛けて、「雪に車の跡をつけながら進み、あなたを待っていたのですよ」という和歌Ｙを詠んで源少将に贈った。

メモ欄

問４　次に示すのは、「桂（かつら）」という言葉に注目して本文を解説した文章である。これを読んで、後の(i)〜(iii)の問いに答えよ。

　本文は江戸時代に書かれた作品だが、「桂」やそれに関連する表現に注目すると、平安時代に成立した『源氏物語』や、中国の故事がふまえられていることがわかる。以下、順を追って解説していく。

　まず、１行目に「桂の院」とある。「桂」は都の中心地からやや離れたところにある土地の名前で、『源氏物語』の主人公である光源氏も「桂の院」という別邸を持っている。「桂の院」という言葉がはじめに出てくることで、読者は『源氏物語』の世界を思い浮かべながら本文を読んでいくことになる。

　次に、16行目の和歌に「月の中なる里」とある。実はこれも「桂」に関わる表現である。古語辞典の「桂」の項目には、「中国の伝説で、月に生えているという木。また、月のこと」という説明がある。すなわち、「月の中なる里」とは「桂の里」を指す。したがって、16行目の和歌は、「まだ桂の里に着いていないはずだが、この場所もまた『月の中なる里』だと思われる。なぜなら、［Ⅰ］」と解釈できる。

　「桂」が「月」を連想させる言葉だとすると、26行目で桂の里が「名に負ふ里」と表現されている意味も理解できる。すなわち、25〜28行目は［Ⅱ］、という情景を描いているわけである。

　最後に、32行目に「桂風を引き歩く」とある。「桂風」は「桂の木の間を吹き抜ける風」のことであるが、「桂風を引き」には「風邪を引く」という意味も掛けら

メモ欄

れている。実は『源氏物語』にも「浜風を引き歩く」という似た表現がある。光源氏の弾く琴の音が素晴らしく、それを聞いた人々が思わず浜を浮かれ歩き風邪を引くというユーモラスな場面である。『源氏物語』を意識して読むと、29～34行目では主人公がどのように描かれているかがよくわかる。すなわち、［Ⅲ］。
以上のように、本文は「桂の院」に向かう主人公たちの様子を、移り変わる雪と月の情景とともに描き、最後は院の預かりや人々と対比的に主人公を描いて終わる。作者は『源氏物語』や中国の故事をふまえつつ、「桂」という言葉が有するイメージをいかして、この作品を著したのである。

(i)　空欄［Ⅰ］に入る文章として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［28］。

①　小倉や梅津とは比較できないくらい月と雪が美しいから
②　雪がこの世のものとは思えないほど光り輝いているから
③　ひどく降る白い雪によって周囲の見分けがつかないから
④　月の光に照らされた雪のおかげで昼のように明るいから

メモ欄

(ii) 空欄 Ⅱ に入る文章として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 29 。

① 空を覆っていた雲にわずかな隙間が生じ、月を想起させる名を持つ桂の里には、一筋の月の光が鮮やかに差し込んできて、明るく照らし出された雪の山が、目がくらむほど輝いている

② 空を覆っていた雲がいつの間にかなくなり、月を想起させる名を持つ桂の里にふさわしく、月の光が鮮やかに差し込み、雪明かりもますます引き立ち、あたり一面が銀色に輝いている

③ 空を覆っていた雲が少しずつ薄らぎ、月を想起させる名を持つ桂の里に、月の光が鮮やかに差し込んでいるものの、今夜降り積もった雪が、その月の光を打ち消して明るく輝いている

④ 空を覆っていた雲は跡形もなく消え去り、月を想起させる名を持つ桂の里だけに、月の光が鮮やかに差し込んできて、空にちりばめられた銀河の星が、見渡す限りまぶしく輝いている

メモ欄

(iii)　空欄 Ⅲ に入る文章として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 30 。

① 「足手の色」を気にして仕事が手につかない院の預かりや、邸の中に入って休息をとろうとする人々とは異なり、「ここもなほ見過ぐしがたうて」とその場に居続けようとするところに、主人公の律儀な性格が表現されている

② 風邪を引いた院の預かりを放っておいて「かしこのさまもいとゆかしきを」と邸に移ろうとする人々とは異なり、「『げにも』とは思す」ものの、院の預かりの体調を気遣うところに、主人公の温厚な人柄が表現されている

③ 軽率にふるまって「あたら雪をも踏みしだきつつ」主人を迎えようとする院の預かりや、すぐに先を急ごうとする人々とは異なり、「ここもなほ見過ぐしがたうて」と思っているところに、主人公の風雅な心が表現されている

④ 「とくも迎へ奉らざりしこと」と言い訳しながら慌てる院の預かりや、都に帰りたくて落ち着かない人々とは異なり、「『げにも』とは思す」ものの、周囲の人を気にかけないところに、主人公の悠々とした姿が表現されている

「大学入学共通テスト」２０２４年度本試験より（一部改変）

メモ欄

■2024年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第3問（50）	1	23	3	5
		24	2	5
		25	5	5
	2	26	2	7
	3	27	4	7
	4	28	2	7
		29	2	7
		30	3	7

■現代語訳

（主人公が）桂の別邸を増設なさったが、少しの間も出かけなさらなかったところ、後から降ってくる雪を待つかのように消え残っている雪にうながされて、突然（別邸に行くことを）思い立ちなさったようだ。このようなお出かけには、源少将や、藤式部をはじめとして、今の世の識者と評判の若者の皆を、必ずお呼びになりそばに付き添わせたが、にわかに思いついたことであったので、こうとさえそれとなく言いなさらず、「ただ親しい邸の事務を担当する者を四、五人とともに（行こう）」と考えなさる。

すぐに御牛車を引き出したところ、「空より花の」と（『古今和歌集』の「冬なのに空から花が散ってくるのは、雲の向こうは春なのであろうか」という和歌をふまえて）おもしろがったが、賞美していくにつれて早くも（雪が）散って消えたのは、こうして止んでしまうということであろうか。「それにしてもひどく見劣りがすることだ」と、人々がとても強く悔しがると、「本当に期待外れで残念だ」と（主人公は）お思いになるが、「それで引き返すようなことも人から見てよくないようだ。やはり法輪寺の法会を口実に（出かけよう）」とお思いになって、ひたすら急がせなさるうちに、再びまっくら闇に一面に曇って、先ほどよりももっと（雪が）散り乱れたので、道の脇に御牛車をたて［＝停め］させながら（主人公が）見なさると、何とかという山や、何とかという河原も、ただ少しの間に（雪で）様子が違ってしまった。

あの（雪が止みかけたので来るのに）渋々だった人々も、たいそうとても笑顔で顔をほころばせて、「これが小倉山の峰であったら」「それが梅津の渡り（のよう）であるのだろう」と、口々に言い合っているけれど、松と竹との区別をさえ、うっかり誤って間違ってしまうにちがいないようだ。（主人公が）「ああ、とてもおもしろいとはこのようなことを言うのであるようだね。やはりここで見て賛美しよう」と言って、そのまま牛車の簾の内にかける帳をかかげなさりながら、

　この場所もまた月の中にある里であるらしい。雪の光もこの世のものとは似ていないことよ。

などとおもしろがりなさるうちに、見た目が好ましい水干を着ている召使いの子どもが、手をふうふう吹き（牛車の）御跡を尋ね追って来て、轅を支えたり、牛車に乗り降りする際に踏み台ともする台のもとにうずくまりながら、「これを御牛車（に乗ってらっしゃる人）に

（お渡しください）」と言って差し出したのは、源少将からのお手紙であったよ。大夫［＝邸の事務を担当する者］が取り次いで差し上げたのを（主人公が）見なさると、（源少将からの手紙には）「いつも置いてきぼりになさらないのに、このように（今日は置いてきぼりになさるとは）、

白雪が降り、振り捨てられたあたり［＝置いてきぼりにされた私］には、恨みのみが幾重にも積もっているよ」

とあるので、（主人公は）微笑みなさって、畳紙に（返歌を書いた）、

尋ね追って来るかと雪に（牛車で）行った跡をつけながら待っているとは、あなたは知らなかったのであろうか

すぐにそこにある松を雪がついたまま折りなさって、その枝に結びつけて（使者に）お与えになった。

次第に日が暮れかかるうちに、あれほど雲や霧などがかかって空が一面に曇ったのも、はやくも跡形もなく一面に晴れて、月を想起させる名を持つ桂の里の月の光が鮮やかに差し込んで来たので、雪の光もますます映えまさっては、天地の果てまで、白銀を叩いて伸ばしたように一面にきらめいて、言いようもなくまぶしいくらい美しい夜の様子である。

桂の院の管理を任された人も出てきて、「このようにいらっしゃるとも存じ上げなかったので、すぐにもお迎え申し上げなかったこと」などと言いながら、頭も上げないで、むやみに付き従うあまりに、牛の頭の雪を払おうとしては、軛に触れて烏帽子を落とし、御牛車が進むだろう道を掃除しようとしては、もったいない［＝せっかくの］雪を踏み荒らしながら、足や手の色を海老のように赤くして、桂の里の風に吹かれ、風邪を引きながら歩き回る。人々が、「さあ早く（牛車を）引き入れよう。あそこ［＝桂の院］の様子もとても見たいので」と言って、一斉にそわそわし合っていると、（主人公は）「本当に」とはお思いになるが、ここもやはり見過ごしにくくて（まだここにいたいと、その場から進めなく思っていた）。

第３講　漢文対策　その１

第５問　次の**【文章Ⅰ】**は、『論語』の一節と、それについて江戸時代の漢学者である皆川淇園（みながわきえん）（一七三五―一八〇七）が著した注釈であり、**【文章Ⅱ】**は、淇園の弟子である田中履堂（たなかりどう）（一七八五―一八三〇）が著した読書論である。これらを読んで、後の問い（**問１～６**）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。

（配点　45）

【文章Ⅰ】

子曰ハク、「賜（注1）也、（ア）女以テレ予ヲ為スニ多ク学ビテ而識ルレ之ヲ者一ト与（かト）。」対（こたへテ）曰ハク、「然リ。（イ）非ズ与。」曰ハク、「非ザル也。予ハ一（注2）以テ貫クレ之ヲ。」

（『論語』による）

メモ欄

夫（注3）子蓋（けだシ）常聞下子貢称二夫子一之言上、似レ為下多学二諸（注4）経一、又（まタ）a能強記識二其文一、因以得レ成二其徳一者上。是故夫子擬（注5）二言其意一、以訊（たづヌル）レ之也。「曰、『非也。予一以貫レ之』」者、言学問之法、不レ可三貪レ多務レ博、龐（注6）（はう）雑（ざつ）冗乱、反闇（くらクス）二其智一。唯得二一要道一主レ之。

A　能強記識二其文一、因以得レ成二其徳一者上。是故夫子擬二言其意一、以

（皆川淇園『論語繹解（えきかい）』による）

（注）
1　賜――孔子の門人である子貢。賜は名。
2　一以――一つのことで。
3　夫子――先生。ここでは孔子のこと。
4　諸経――『詩経』『書経』といった儒教の古典。
5　擬言――推し量って言う。
6　龐雑冗乱――雑然としてまとまりがない。

メモ欄

【文章Ⅱ】

淇園先師(注7)毎(ウ)謂フレ読ムレ書ヲ、B「日ひびニ読ミ二了をフルハ数紙ヲ一、不レ如カ三日ニ知リ二得ルニ数字ヲ一。」此レ似テ二迂う回くわいニ一、還かヘツテ甚ダ便びん(注8)捷せふナリト。」余因リテ又タ云フ、「粗(注9)二渉スルハ万巻ヲ一、不レ如カ三精二通スルニ一巻ニ一。此レ似テ二狭けふ隘あいニ一、亦まタ(b)実ハ博達ナリト。」世ニ謂ヒテ二多ク読ムレ書ヲ者ヲ一、以テ為シ二博学ト一、輒すなはチ欽きむ(注10)二羨せんス之ヲ一。不レ知ラ二是レハ此レ多識ニシテ、不ルヲレ可カラ謂フレ博ト。C博者莫所不通達之謂、精二通スルモ一書ニ一、亦タ可シレ称ス二博学ト一。

（田中履堂『学資談』による）

（注）
7　先師――すでに亡くなった先生。
8　便捷――早道である。
9　粗渉――大ざっぱに目を通す。
10　欽羨――敬いあこがれる。

メモ欄

問1　波線部(ア)〜(ウ)のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①〜④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 30 〜 32 。

(ア)「女」 30
① かれ
② だれ
③ あなた
④ むすめ

(イ)「非与」 31
① ちがうのですか
② そむくのですか
③ けなされるのですか
④ まちがわれたのですか

(ウ)「毎」 32
① たまたま
② ときおり
③ とりわけ
④ つねづね

メモ欄

問２　傍線部Ａ「夫子擬㆓言其意㆒以訊㆑之也」について、孔子が子貢の考えを「擬言」して訊（たず）ねた理由を筆者はどのように推測しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 33 。

① 子貢の日頃の言動には、「先生は古典を多く学んでその内容をよく覚えることよりも、人徳の完成を追求しているのだ」と考えているふしが見受けられたから。

② 子貢の日頃の言動には、「先生が古典を多く学んでその内容をよく覚えるのは、学者としての名声を獲得するためだ」と考えているふしが見受けられたから。

③ 子貢の日頃の言動には、「先生は古典を多く学んでその内容をよく覚えることで、有徳者を心服させたのだ」と考えているふしが見受けられたから。

④ 子貢の日頃の言動には、「先生は古典を多く学んでその内容をよく覚え、それによって人格を完成させたのだ」と考えているふしが見受けられたから。

メモ欄

問３　傍線部Ｂ「日読㆓了数紙㆒、不㆑如㆔日知㆓得数字㆒。」の解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 34 。

① 漢文の書物を読むうえで、日々数ページの文章を何度も音読するよりも、日々数文字から成る句を確実に覚えていくほうがよい。

② 漢文の書物を読むうえで、日々数ページの文章をただ読み通すよりも、日々数文字の漢字の意味や用法を理解していくほうがよい。

③ 漢文の書物を読むうえで、日々数文字から成る句を確実に暗記するよりも、日々数ページの長い文章を多読するほうがよい。

④ 漢文の書物を読むうえで、日々数文字の漢字の意味や用法を習得するよりも、日々数ページの文章を繰り返し読むほうがよい。

メモ欄

問４　傍線部Ｃ「博 者 莫 所 不 通 達 之 謂」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 博 者 莫下所レ不二通 達一之 謂上　　博は通達せざる所の謂（いひ）莫く

② 博 者 莫レ所レ不二通 達一之 謂　　博は通達せざる所莫きの謂にして

③ 博 者 莫レ所レ不二通 達 之 謂一　　博は通達の謂（い）はざる所莫く

④ 博 者 莫レ所レ不二通 達 之 謂一　　博は通達を之れ謂はざる所莫くして

メモ欄

問５　二重傍線部ａ「又」、ｂ「亦」と同じ意味で用いられている「また」として最も適当なものを、次の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを繰り返し選んでもよい。ａ「又」の解答番号は［36］。ｂ「亦」の解答番号は［37］。

① これはまたとない絶好のチャンスだ。

② 校長または教頭が説明に来るはずだ。

③ 勝負では、運もまた実力のうちである。

④ 友であり、そのうえまたライバルである。

メモ欄

問６　**【文章Ⅰ】**から読み取れる皆川淇園の学問に対する考え方と、**【文章Ⅱ】**から読み取れる田中履堂の読書に対する考え方を説明したものとして最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は［38］。

① 皆川淇園は、学問では、要点をまず把握し、それに基づいて個別の事例を分析すべきだと説いている。田中履堂は、読書によって多くの具体的な事柄を知って、それら全てを貫通する法則を発見することが大切だと説いている。演繹的に学ぶのか帰納的に学ぶのかという点で、両者の考えは対立している。

② 皆川淇園は、学問では、鍵となる部分を素早く見極めて、それを広く適用して要領よく学ぶべきだと説いている。田中履堂は、一冊の書物を精読することを通じて、学問の土台をじっくりと築くことが大切だと説いている。学びにおいて効率を重視するのか否かという点で、両者の考えは対立している。

③ 皆川淇園は、学問では、精密な分析を通じて、現実の問題に応用できる原理を抽出すべきだと説いている。田中履堂は、現実の問題の解決につながる知識を集積するためには、様々な分野に関係する書物の熟読が大切だと説いている。学びにおける実用性を重んずる点で、両者の考えは通底している。

④ 皆川淇園は、学問では、雑多な知識に惑わされないように、基軸となる要点を把握すべきだと説いている。田中履堂は、多くの書物を乱読するよりも、一冊の書物を隅々まで深く理解することが大切だと説いている。学びにおいて多くの知識を得ることに重きを置かない点で、両者の考えは通底している。

「大学入学共通テスト」２０２５年度本試験より（一部改変）

メモ欄

■2025年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第５問（45）	1	30	3	4
		31	1	4
		32	4	4
	2	33	4	7
	3	34	2	6
	4	35	2	6
	5	36	4	3
		37	3	3
	6	38	4	8

■現代語訳

【文章Ⅰ】

先生〔＝孔子〕が言うことには、「子貢よ、あなたは私を多くのことを学んでそれを覚えている者だと思うか」と。（子貢が）お答えして言うことには、「そうです。ちがうのですか」と。（孔子が）言うことには、「ちがう。私は一つのことで貫いている」と。

先生〔＝孔子〕は思うに常日頃子貢が先生〔＝孔子〕を褒め称える言葉を聞くにあたって、多くの儒教の古典を学び、その上またよく記憶できてその内容を知り、それによって人格を完成させることができた者だと考えているように見受けられた。そのため先生〔＝孔子〕は子貢の考えを推し量って言おうとして、このようなことを尋ねたのである。「（孔子が）言うことには、『ちがう。私は一つのことで貫いている』（というの）」は、趣旨としては、学問の方法は、多くのことを貪って博識となることに努力をして、雑然としてまとまりがない状態になり、（知識に惑わされて）かえって叡智を暗愚にすべきではない。ただ一つの基軸となる要点を把握してそれを重視するだけだと（いうことだ）。

【文章Ⅱ】

亡くなった（皆川）淇園先生がつねづね書物を読む（うえで大切な）ことを言っていたのは、「日々数ページの文章をただ読み通すよりも、日々数文字の漢字の意味や用法を理解していくほうがよい。これは遠回りのようで、かえって非常に早道である」と。私がそこでさらに言うのは、「多くの書物に大ざっぱに目を通すよりも、一冊の書物に精通するほうがよい。これは（視野が）狭くなりそうで、これまた実は博識になれるのである」と。世間で多くの書物を読む者を博学とみなして、いつもそのような（多読する）人を敬いあこがれる。（しかし）これ〔＝多読する人〕は多くの知識があるだけで、博学だとは言えないことをわかっていない。博学とは精通・熟達していないところがないということを言うのであって、一冊の書物に精通することも、また博学だと言うことができる。

第４講　漢文対策　その２

第４問

次の文章は、唐の杜牧（とぼく）（八〇三―八五二）の【詩】「華清宮（かせいきゅう）」とそれに関連する【資料】Ⅰ～Ⅳである。これを読んで、後の問い（問１～６）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点　50）

【詩】

華（注1）清宮

長安ヨリ回望スレバ繡（しゅう）（注2）成㆑ス堆ヲ

山頂ノ千門次（注3）第ニ開ク

一騎紅（こう）（注4）塵（ぢん）妃（注5）子笑フ

無㆔シ人ノ知㆓ル是（こ）レ荔（れい）（注6）枝ノ来㆒タルヲ

メモ欄

【資料】

Ⅰ　『天宝遺事』（注7）云、「貴妃嗜茘枝。当時涪州（注8）致貢以馬逓（注9）、馳載七日七夜至京。人馬多斃於路、（ア）百姓苦之。」

Ⅱ　『畳山詩話』（注10）云、「明皇（注11）致遠物以悦婦人。窮人力絶人命、有所不顧。」

Ⅲ　『遯斎閑覧』（注12）云、「杜牧華清宮詩（イ）尤膾炙人口。拠唐紀（注13）、明皇以十月幸驪山、至春即還宮。是未嘗六月在驪山也。然茘枝盛暑方熟。」

（【詩】と【資料】Ⅰ～Ⅲは蔡正孫『詩林広記』による）

メモ欄

Ⅳ

『甘(注14)沢謡』ニ曰ハク、「天宝十四年六月一日、
貴妃誕(たん)(注15)辰(しん)、駕(が)(注16)幸ス二驪山一ニ。命ジテ二小(注17)部音声一ニ
奏シ二楽ヲ長(注18)生殿一ニ、進メシムルモ二新曲一ヲ、未ダレ有ラレ名。会(たまたま)南(注19)
海献ジ二茘枝一ヲ、(ウ)因名ヅクト二茘(れい)枝(し)香(かう)一ト。」

（【資料】Ⅳは程大昌(ていだいしょう)『考古編』による）

（注）
1　華清宮――唐の都長安の郊外にある、驪山(りざん)の温泉地に造営された離宮。
2　繡成レ堆――綾絹(あやぎぬ)を重ねたような驪山の山容の美しさをいう。
3　次第――次々と。
4　紅塵――砂煙。
5　妃子――楊貴妃(ようきひ)のこと。唐の皇帝玄宗(げんそう)（六八五―七六二）の妃(きさき)。
6　茘枝――果物のライチ。中国南方の特産物。
7　『天宝遺事』――唐の天宝年間（七四二―七五六）の逸話を集めた書。王仁裕(おうじんゆう)著。
8　涪州――中国南方の地名。
9　馬逓――早馬の中継による緊急輸送。公文書を運ぶのが本来の目的。
10　『畳山詩話』――詩の解説・批評や詩人の逸話を載せた書。謝枋得(しゃぼうとく)著。
11　明皇――玄宗を指す。
12　『遯斎閑覧』――学問的なテーマで書かれた随筆集。陳正敏(ちんせいびん)著。
13　唐紀――唐の時代についての歴史記録。
14　『甘沢謡』――唐の逸話を集めた書。袁郊(えんこう)著。
15　誕辰――誕生日。

メモ欄

16 駕――皇帝の乗り物。
17 小部音声――唐の宮廷の少年歌舞音楽隊。
18 長生殿――華清宮の建物の一つ。
19 南海――南海郡のこと。中国南方の地名。

メモ欄

問１　この【**詩**】の形式と押韻の説明として最も適当なものを、次の①〜⑥のうちから一つ選べ。解答番号は［31］。

① 形式は七言律詩であり、「開」「来」で押韻している。
② 形式は七言律詩であり、「堆」「開」「来」で押韻している。
③ 形式は七言律詩であり、「堆」「開」「笑」「来」で押韻している。
④ 形式は七言絶句であり、「開」「来」で押韻している。
⑤ 形式は七言絶句であり、「堆」「開」「来」で押韻している。
⑥ 形式は七言絶句であり、「堆」「開」「笑」「来」で押韻している。

メモ欄

問２　波線部(ア)「百姓」・(イ)「膾炙二人口一」・(ウ)「因」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［32］～［34］。

(ア)「百姓」［32］
① 民衆
② 旅人
③ 皇帝
④ 商人
⑤ 罪人

(イ)「膾炙二人口一」［33］
① 異口同音に批判する
② 一言では到底表せない
③ 詳しく分析されている
④ 広く知れわたっている
⑤ 人々が苦痛に感じている

(ウ)「因」［34］
① そのために
② やむをえず
③ ことさら
④ とりあえず
⑤ またもや

メモ欄

問３　傍線部「窮人力絶人命、有所不顧。」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 35 。

① 窮㆔人力絶㆓人命㆒、有㆓所不㆒㆑顧。
　人力の人命を絶たんとするを窮めて、所として顧みざる有りと。

② 窮㆓人力絶人命㆒、有所㆑不㆑顧。
　人の力(つと)めて絶人の命を窮むるは、有れども顧みざる所なりと。

③ 窮人力絶人命、有所不㆑顧。
　窮人の力は絶人の命にして、有る所顧みざるのみと。

④ 窮㆓人力㆒絶㆓人命㆒、有㆑所㆑不㆑顧。
　人力を窮め人命を絶つも、顧みざる所有りと。

⑤ 窮㆑人力絶㆑人命、有㆑所不㆑顧。
　人を窮めて力(つと)めしめ人を絶ちて命じ、所有るも顧みずと。

メモ欄

問４　**【詩】**の第三句「一 騎 紅 塵 妃 子 笑」について、**【資料】Ⅰ・Ⅱ**をふまえた解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［36］。

① 玄宗のため楊貴妃が手配した茘枝を早馬が砂煙を上げながら運んで来る。それを見て楊貴妃は笑う。

② 楊貴妃のため茘枝を手に入れようと早馬が砂煙のなか産地へと走りゆく。それを見て楊貴妃は笑う。

③ 楊貴妃の好物の茘枝を運ぶ早馬が宮殿の門の直前で倒れて砂煙を上げる。それを見て楊貴妃は笑う。

④ 玄宗の命令で楊貴妃の好物の茘枝を運ぶ早馬が砂煙を上げ疾走して来る。それを見て楊貴妃は笑う。

⑤ 玄宗に取り入りたい役人が茘枝を携えて砂煙のなか早馬を走らせて来る。それを見て楊貴妃は笑う。

メモ欄

問５　**【資料】Ⅲ・Ⅳ**に関する説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37 。

① **【資料】Ⅲ**は、玄宗一行が驪山に滞在した時期と茘枝が熟す時期との一致によって、**【詩】**の描写が事実に符合することを指摘する。**【資料】Ⅳ**は、玄宗一行が夏の華清宮で賞玩したのは楽曲「茘枝香」であったことを述べており、**【資料】Ⅲ**の見解に反論する根拠となる。

② **【資料】Ⅲ**は、玄宗一行が驪山に滞在した時期と茘枝が熟す時期との一致によって、**【詩】**の描写が事実に符合することを指摘する。**【資料】Ⅳ**は、夏の華清宮で玄宗一行に献上された茘枝が特別に「茘枝香」と名付けられたことを述べており、**【資料】Ⅲ**の見解を補足できる。

③ **【資料】Ⅲ**は、玄宗一行が驪山に滞在した時期と茘枝が熟す時期との不一致によって、**【詩】**の描写が事実に反することを指摘する。**【資料】Ⅳ**は、夏の華清宮で玄宗一行に献上された「茘枝香」が果物の名ではなく楽曲の名であることを述べており、**【資料】Ⅲ**の見解を補足できる。

④ **【資料】Ⅲ**は、玄宗一行が驪山に滞在した時期と茘枝が熟す時期との不一致によって、**【詩】**の描写が事実に反することを指摘する。**【資料】Ⅳ**は、玄宗一行が「茘枝香」という名の茘枝を賞味した場所は夏の南海郡であったことを述べており、**【資料】Ⅲ**の見解を補足できる。

メモ欄

⑤ **【資料】Ⅲ**は、玄宗一行が驪山に滞在した時期と茘枝が熟す時期との不一致によって、**【詩】**の描写が事実に反することを指摘する。**【資料】Ⅳ**は、「茘枝香」という楽曲名が夏の華清宮で玄宗一行に献上された茘枝に由来すると述べており、**【資料】Ⅲ**の見解に反論する根拠となる。

メモ欄

問６　**【資料】**をふまえた**【詩】**の鑑賞として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［38］。

① 驪山の華清宮を舞台に、開放される宮殿の門、公文書を急送するはずの早馬、楊貴妃の笑みと、謎めいた描写が連ねられたうえで、それらが常軌を逸した茘枝の輸送によるものであったことが明かされる。事実無根の逸話をあえて描き、玄宗が政治を怠り宮殿でぜいたくに過ごしていたことへの憤慨をぶちまけている。

② 驪山の遠景から華清宮の門、駆け抜ける早馬へと焦点が絞られ、視点は楊貴妃の笑みに転じる。笑みをもたらしたのは不適切な手段で運ばれる茘枝であった。事実かどうか不明な部分があるものの、玄宗と楊貴妃の逸話を巧みに用い、玄宗が為政者の道を踏み外して楊貴妃に対する情愛に溺れたことを慨嘆している。

③ 驪山の山容や宮殿の門の配置を詳しく描き、早馬が上げる砂煙や楊貴妃の笑みなどの細部も見逃さない。早馬がもたらすであろう茘枝についても写実的に描写している。玄宗と楊貴妃に関する事実を巧みに詠み込んでおり、二人が華清宮でどのような生活を送っていたかについての歴史的知識を提供している。

④ 美しい驪山に造営された華清宮の壮麗さを背景に、一人ほほ笑む楊貴妃の艶（あで）やかさが印象的に描かれたうえで、ほほ笑みをもたらした茘枝の希少性について語られる。事実かどうかわからないことを含むものの、玄宗が天下のすべてを手に入れて君臨していたことへの感嘆を巧みに表現している。

メモ欄

⑤ 驪山に建つ宮殿の門は後景に退き、ほほ笑む楊貴妃の眼中には一騎の早馬しかない。早馬がもたらそうとしているのは、玄宗が楊貴妃とともに賞味する茘枝であった。事実かどうかを問題とせず、玄宗と楊貴妃の仲睦（むつ）まじさが際立つ逸話を用いることで、二人が永遠の愛を誓ったことを賛美している。

「大学入学共通テスト」２０２４年度本試験より（一部改変）

メモ欄

■2024年度 本試験

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第４問（50）	1	31	5	5
	2	32	1	5
		33	4	5
		34	1	5
	3	35	4	7
	4	36	4	7
	5	37	5	8
	6	38	2	8

■現代語訳

【詩】

華清宮（かせいきゅう）〔＝唐の都長安の郊外にある、驪山（りざん）の温泉地に造営された離宮〕
長安から振り返って遠くを望むと（驪山は）綾絹（あやぎぬ）を重ねたように美しい
山頂にある（華清宮の）多数の門が次々と開く
ある騎馬が砂煙（を上げ疾走して来る。それを見て）楊貴妃（ようきひ）〔＝唐の皇帝玄宗（げんそう）の妃（きさき）〕は笑う
これがライチを届けに来た（騎馬である）のを知る人はいない

【資料】

Ⅰ『天宝遺事』に書かれている、「楊貴妃はライチを好んだ。当時、涪州（ふうしゅう）は貢ぎ物を届けるにあたって（本来は公文書を運ぶための）早馬の中継による緊急輸送を用いて、走ること七日七晩で都に到着した。（輸送にかかわった）人も馬もたくさん道中で死に、民衆はこれに苦しんだ」と。

Ⅱ『畳山詩話』に書かれている、「玄宗皇帝は遠くのものを取り寄せ、女性〔＝楊貴妃〕を喜ばせた。人の力を使い尽くして人命を犠牲にしても、気にしないところがあった」と。

Ⅲ『遯斎閑覧（とんさいかんらん）』に書かれている、「杜牧（とぼく）の華清宮の詩はなるほど広く知れわたっている。唐の時代についての歴史記録によると、玄宗皇帝（と妃の楊貴妃）は十月に驪山にお出かけをし、春になるとすぐに皇宮に帰った。したがって、これまで一度も六月〔＝夏〕には（玄宗皇帝の妃である楊貴妃も）驪山にいない。しかしライチは夏の暑い盛りの時期になってようやく熟す」と。
〈玄宗皇帝と楊貴妃が華清宮にいる時期にはライチは熟していないはずなので、ライチが華清宮に届けられたという杜牧の詩とは時期が不一致となる。〉

Ⅳ　『甘沢謡』に書かれていることには、「天宝十四年六月一日は、楊貴妃の誕生日で、皇帝の乗り物（に乗った皇帝）が驪山に行幸した。唐の宮廷の少年歌舞音楽隊に命令して音楽を長生殿〔＝華清宮の建物の一つ〕で演奏させ、新曲を（誕生日祝いとして）進呈させたが、まだ（その楽曲には）名前がなかった。ちょうどその時南海郡がライチを献上し、そのために（新曲に）『茘枝香（れいしこう）』と名付けた」と。
〈六月にライチが届いたということが述べられている。〉

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。